

熊野の
木林から



旧・大塔村には、今でも自然度の高い森林が残っており、そこには今でも天狗が潜んでいそうな荘厳な雰囲気がある。その一方で、かつてはダルに取り憑かれた多くの行き倒れ者もいたように、危険度も高かったようだ。

きた。聞くと「天狗(てんぐ)に連れられてトヤグラ(岩山)に行っていた。天狗が怖いから袂(たもと)に入っている、というので袂に入ってトヤグラ

怪熊野

「龍神村の怪異(其の二)」

其の(土)

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



をのぞいてみると、天狗やはび(マムシ)がたぐさんいた」という。このトヤグラは現在の嶽山のことだと思われるが、富里の天狗話は他にもあり、例えば、正月の28日になるとトヤグラから太鼓や笛の音が聞こえ、天狗が酒を飲んで騒いでいるからだという。また、山にシジミ貝の殻がたくさんあるのを見かけたら、それは天狗が食べた跡だという。トヤグラに集まる天狗の中のシモツイの天狗は、撃たれて片羽根が落ちそうになっていて、飛ぶとキリキリという音がしたという。他にも、悪事をはたらくと「コブクロさん」に天狗の所に連れて行かれ木の上に乗せられるという。「コブクロさん」が何者なのかは分からないが、天狗と仲が良いらしい。また、ある人の祖先の子が戸栗坂で遊んでいたところ天狗にさらわれた。皆で探し回っても見つからなかったが、山の奥にハンチャ(羽織)がかけられた石を見つけた。その後、この家の者が和歌



日置川は清流として名高いが、合川ダムでせき止められているため、川にすみ、海と行き来する大蛇「モリトウさん」も、今ではダムに閉じ込められ海にまで下ることができないのかもしれない。

山へ越す際に石を持っていったが、どうも落ち着かず、石を持って帰ってきた。石は高さが2尺くらい、幅1尺くらいで人の形のように、今でも祭られているという。

合川には「モリトウさん」と呼ばれる黒い大蛇がすんでいて、頭に角をもっているそうだ。年に一度、海へ水浴びに行つて身体を清め、再び合川に帰る際には人に化けて川岸を歩いて帰るといふ。村人を驚かせないための配慮だとのことだ。百間山には自然石で造られた千体仏があるが、ダルに取りつかれて亡くなった方のお墓だという説がある。ダルは、このコラムでも何度も登場している熊野の代表的な怪異で、山道を歩いている時に急にけんたい感に襲われ、ひどいと行き倒れてしまう。その亡きがらをたくさん納めたのであるなら、当時の山歩きがいかに危険であったのかを示す話であろう。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師。12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)、NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

